

春期福音特別集会 (2) (京都)

福音の身証

——マタイ伝第5章13～20節——

1993年5月16日

小池辰雄

海の塩 キリストの光 隠されたる福音 ハートの人であれ キリストの光で読む 遺れる者
隠れています神 終末の神の国 神の望み ペンテコステの預言 キリストのみ腕を枕に 祈り

【マタイ5】

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。14 汝らは世の光なり。山の上
にある町は隠ることなし。15 また人は灯火をともして灯の下におかず、灯
台の上におく。かくてともしびは家にあるすべての物を照らすなり。16 斯く
のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、
天にいます汝らの父を崇めん為なり。

17 われ律法また預言者を毀つために来れりと思ふな。毀たんとて来らず、
反つて成就せん為なり。18 誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法
の一点、一画も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。19 この故にもし此等
のいと小さき誠命の一つをやぶり、且その如く人に教うる者は、天国にて最
小さき者と称えられ、之を行ひ、かつ人に教うる者は、天国にて大なる者と
称えられん。20 我なんじらに告ぐ、汝らの義、学者・パリサイ人に勝らずば、
天国に入ること能わず。

●海の塩

夫妻というものがキリストの愛で一つになっている。これは非常に大事なことです。奥
さんの陰の力が働いている。夫婦というものはそういう関係になつてないと、家庭そのも
のが決してよくはない。一方的な方が、男でも女でも、おありかと思ひますが、なかなか
大変なことです。夫婦が信仰的に一体となつていると、その家庭の子どもたちは必ず自然
に恵まれます。自然にその雰囲気でもつてその世界に入っていく。一方的だと、これがや
はり子どもにおいて分裂する場合があります。とにかく、いろいろな場合がありますから。

「我に従わんとする者は、己が十字架を負いて我に従え」



「己が十字架を負って、私に従ってきなさい」と、キリストははつきり言われた。我々は誰でもが何らかの十字架を負っている。また、負わなければ本当でないわけです。それがまた、

「我が荷は軽し」

で、キリストに在っては、それが楽に負える。

それでは、マタイ伝5章に入ります。

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。

キリスト者はお砂糖ではない、塩だ、と。一番素晴らしい塩は海です。大海にあのような塩分がどうしてできるのかわからない。どんな汚い河が流れ込んでも、海はちゃんと塩で浄化してしまう。そして、水蒸気で上がっていくと、今度は素晴らしい真清水のような水が降りてくる。本当に大自然というのは素晴らしい。クリスチャンもそういう塩、大海の塩だ、何が来ても大丈夫な塩だ。そして、相手を祝福してしまう。岩塩ではない、海の塩です。

●キリストの光

14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。15 また人は灯火をと
もして升の下におかず、灯台の上におく。かくてともしびは家にあるすべて
の物を照らすなり。

それから、何といつても、光です。太陽がなければ、我々は光なんてことはわからない。お天道さんがあるので、光という。霊的な光は、もちろん言うまでもなく、神・キリストです。神・キリストの生命を、み霊を受けると、光ならざるを得ない。

「汝らは世の光なり」

とは、

「私がお前たちの中に入って光となるよ」

ということ。

「ありがとうございます」

と言って受けとる。

「世の光になんか、なかなか成れません」

なんて言う必要はない。成れっこないのだから。

「キリストが入ってくださいって、光らざるを得ない」

という、そういう光です。この光は素晴らしい光です。人には見えないかも知れない。けれども、周りに天国を現するような光です。審く光ではない、相手を救い上げる光です。闇を除けるのではなく、闇を光に変える光です。レンブラントの絵を見ると、ほとんど必



ずどこかから光が射している。あれは素晴らしい。

16 斯くのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。

「善き行為」は、魂がキリストの義を、愛をいただかなければ、行為は出てきつこない。行為を問題にする必要はないけれども、キリストの愛をただけ、行為が必ず現れざるを得ない。信行一如です。

17 われ律法また預言者を毀つために来れりと思ふな。毀たんとて来らず、反つて成就せん為なり。

「自分は旧約の律法を破らんとして来たのではない、これを全うするため、成就するため来た」と。

「プレローマ」という字がありますが、「充滿させる」という意味です。

● 隠されたる福音

18 誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一点、一画も廃ることなく、悉とく全うせらるべし。

「律法の一点、一画」というのは随分厳密な表現ですが、ヘブライ語では、一点、一画の活字があるから、こういう言い方をなさるわけです。

律法は実は、隠されたる福音であった。

「汝、殺すべからず」(出エジプト20・13)ではない。

「汝は殺人はしない。私がお前の神だから、汝は殺人はしない」

と信じて語っている。あれは断言命法なんです。禁令ではない。ヘブライ語の「ロー」という字はそういう字で、「べからず」ではない。これは誤訳とは言いませんけれども、本当の精神は、

「汝は殺人はしない」

「汝は姦淫はしない」

「汝は盗みはしない」

「汝は嘘はつかない」

ということですよ。だから、あれは「十戒」ではない、「十言」なんです。十の言〇です。戒めではない。相手を信じかかって神さまが仰っている言です。

「お前は勉強するねえ」であって、「勉強せよ」ではない。

「お前は勉強するねえ」

と信頼している。そうすると、勉強してないと、

「これは悪いな。私は勉強しなくては」



となる。

「勉強しろ」

と言うと、

「嫌だよ」

なんていうことになる。

「律法は罪を刺激する」

と言う。ところが、福音はおのずからそこに従っていくことになる。だから実は、旧約から新約に至るまで、本当は、

「旧約は隠れたる福音であり、新約は露なる福音である」

と言っても差し支えない。それを歴史的に読み間違え、取り間違えをしていると言いたいくらいです。

信愛関係でないものは何も本ものにならない。義務命令関係ではダメです。学校でも会社でもみなそうです。組合なんかいらぬ。国際関係は本当はそうなんです。非戦論ではない。善隣です。隣りと誼を共にする。地球の至る所に太陽の光は来ています。神さまの光は至る所の国民に国家に来てはいるわけです。世界は一つなんです。「東西」でも何でもありません。地球は丸いから、東も西もありはしない。

私たちはそういう大きな福音です。仏壇があつたつていいではないか。祖先の人が仏さまを拜んでいたら、

「ああ、結構でございませう」

と、それに敬意を表する。この福音は大きいんですよ。相対的な区別をしているうちは、まだダメなんです。そこに本ものがあれば、それを全部含んでしまう。しかし、偽りはダメだ。偽りとは戦う。

●ハートの人であれ

クラークさんが、

「ビー ジェントルマン」(紳士であれ)

と言った。

「学校の規則は要らん、お前たちはジェントルマンであれ」

と言った。それもいいけれども、ジェントルマンでなくなつていいんだ、

「ザイ メンシュ」(人であれ)

本当の「人であれ」ということです。心の人であれ、人らしき人であれ、ということ。ソクラテスは、

「人らしい人がいるかと思つて、一生懸命で昼間、行灯を点して通りを見ているけれども、本当の人らしい人がいない」



と言った。「人」ということは、心の人、ハートのある人ということです。ハートというのは大事なものだ。暖かみのある人。暖かみが無くなったら、これは人ではない。理屈が先に立ったらダメです。意志が先に立つてもダメ。知情意というけれども、これは情の世界です。情にもいろいろあるけれども、言葉の一番深い意味で、ハートの人は本当に信頼ができる。楽に交われる。誰でもみな知情意というものがある。この情の世界が薄いと困る。心理学的に言っても、人間の一番大事なものは情だそう。やはり、ハートの問題です。さきほどのマタイ伝で、

16 ^か斯くのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為^{おこない}を見て、天にいます汝らの父を崇めん^{あがため}為なり。

とある。善き行為を見て、その人を誉めるのではない。その行為を見て、

「天に在す父を讚美せんが為なり」

という。これは本当に素晴らしい。やはりキリストの言です。「ああ、あの人は」と人を誉めるのではない。もちろん、そこで人に感心することは結構です。けれども、それにおいて神を讚めること。これは本当のクリスチャンでなければできない。普通の人にはそれができない。人を誉めてばかりいる。ダメだよ、それは。人を誉めるのは相対的な次元、その相対次元を乗り越えて、神を讚美しなければ、クリスチャンの交わりではなくなる。

海の水は、なめてみなければ、塩辛いということがわからない。その塩の味はなめてみるまではわからない。本当に溶けている世界はそういうものです。溶けている世界はそれに接するまでは見えない。ある時は火のごとく燃え立つ。ある時は温泉のごとくに湧き出る。それはみな自由自在です。パウロのコリント前書9章のあの言葉の通りです。その人たちの立場に自分が溶け込んでいって、そして、それを祝福していく、助けていく。それが本当の助け方です。

「律法と預言者」

という言い方は「旧約聖書」ということです。ユダヤ人は「旧約聖書」という言い方をしない。

「律法と預言者及び諸書」

という言い方をする。「諸書」というのは、詩篇や箴言等が入る。

「キリストはそれを全部成就した」

と言う。全部、キリストに集中している。いろいろな支流がキリストというガリラヤ湖に注いでいるようなもの。イエスはガリラヤ湖だ。そこにいろいろな支流が注いでいる。そこにおのずから成就している。いや、キリストというのはそれどころの騒ぎではない。律法以上、預言者以上です。いきなり神さまの天界から来ていますから大変な方です。それは、

「旧約聖書は我につきて証しするなり」

なんておっしゃっているけれども、イエスを証しようとしても、イエスは証しきれない。



そういう凄い内容です。だから、完全に成就してしまおう。

●キリストの光で読む

キリストに捕まえられると、旧約聖書が楽に読める。キリストに捕まえられなかったら、旧約聖書は読めません。ひっかかってしまおう、囚われてしまおう。クリスチャンが旧約から新約まで全部を「聖書」というのは、それがキリストの光で読めるから、見えるからです。

「いや、それは旧約の読み方ではない、もつと歴史的に読め」

なんて学者は言う。それはただ歴史的古典として読んでいただけだ。そうではない。救いの書として、神の書として読むときには、キリストの光で読まなかったらダメです。そうすると、旧約のどこを読んでも躓きません。そうでなくて、いきなり旧約を読んだら躓いてしまう。旧約聖書というのは未完成だから。いろいろな歴史的な段階があるから。

ここで完全に、旧約以上の世界をそこに展開した。

19この故にもし此等のいと小さき誠命いままじめの一つをやぶり、且その如く人に教うる者は、天国おおいにて最小いとき者と称となえられ、之を行い、かつ人に教うる者は、リサイ人びとに勝からざれば、天国おおいに入いること能あたわず。

キリストは水を割らずに言われる。「汝らの義」とは、

「私を受けなさい、そうしたら、お前たちにこの義が入る。そうしたら、学者(教師)

法師()・パリサイ人より上だ」

ということ。律法を大いに知っていて、それを拳けん々けん服膺ふくようして自ら誇っているのを「パリサイ人びと」という。パリサイ精神というのは自己義認じごぎにんのことです。それよりも、

「義なる私を受けとれば、愛なる私を受けとれば、その上の世界におのずから入っていく」

ということですよ。

教会の方々もそれぞれ結構です。けれども、我々が示されている、受けとらされている世界は、これは大事な世界ですから、皆さんそれぞれ一人ひとりが大きな使命を担っている。

●遺れる者

そこで、これから私が申し上げたいのは、あなた方のことをイザヤ書がちゃんと語っている。イザヤ書1章に、

「²天よ、きけ。地よ、耳をかたぶけよ。

と。「人よ聞け」ではなくて、天地に向かつて語っている。なぜそうかというと、

エホバの語りたもう言あり。曰く、われ子をやしなひて育てしにかれらは我にそむけり。



イスラエルはダメだということを言おうとしている。

3 牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる。然どイスラエルは識ず、わが民はさとらず。

預言者は遠慮なく言っている。

4 ああ罪をおかせる国人、よこしまを負うたみ、悪をなす者のすえ、壊りそこなう種族、かれらはエホバをすて、イスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり。⁵ なんじら何ぞかさねがさね悖りてなおうたれんとするか。その頭はやまざる所なく、その心はつかれはてたり。⁶ 足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創痕と打傷と腫物とのみなり。而してこれを合すものなく包むものなく、亦あぶらにて軟らぐる者なし。……

惨憺たるものだ、どうにもならん、と。

9 万軍のエホバわれらに少しの遺をとどめ給うことなくば我等はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん。」(イザヤ1:2～9)

ソドム、ゴモラは神の火で焼かれてしまって、死海の中に埋まってしまった。

この「遺られるもの」という言葉です。あなた方は遺れる者です。「シエール」というイザヤは自分の子どもに

「シエール ヤーシューブ」(遺れる者帰りゆかん)

という名前をつけた。我々は

「遺れる者、キリストの許に帰り往く者」

です。あなた方は終りまで遺れる者です。クリスチャンがどうなるうが、キリストから離れない。それが遺れる者です。我々の側はどうであつたつていい、キリストから離れさせなければ。キリストが、

「我れ汝らを棄てず。我れ汝らを愛す」

という。それに全幅の信頼をもつて進む。こちら側ではない。仏道に「大慈大悲」という言葉があるが、キリストの愛はまさに大慈大悲だ。

私は、皆さんが「遺れる者」であるということとを今日は言いたくしてしようがない。何がどうなつても、日本のキリスト教界がどうなるうと、

「我々はキリストの遺れる民なり、イザヤ書の預言を成就する者なり」

ということとです。それは神の国のためですよ。

「汝らの中に神の国あり」

と。だから。遺れる者は、新約の光、キリストの言から言えば「神の民」です。

イザヤ書10章20～22節は素晴らしいところです。

「20 その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを撃し者にたよらず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん。」



「その日」とは歴史の終末的な日のこと。神の国が特別なカイロスでやってくるような時です。

²¹その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかえるべし。²²ああイスラ

エルよ、なんじの民は海の沙のごとしといえども遺りて帰ってきたる者はただ

僅少ならん。そは敗壞すでにさだまりて義にて溢るべければなり。」(イザヤ

10・20～22)

「たくさんのクリスチャンはあるけれども本ものは僅かだよ」

と。名前ばかりのクリスチャンが多い。キルケゴールが、

「本当のクリスト者は天才より少ない」

と言った。或いは然らんです。

「さあ、私はその少ない中に入るだろうか？」

なんて、そんな心配は要らん。あなた方はみな入っている。本当の真理は比較してはダメ

です。己の絶対的な問題として受けとる。そうしたら、もう他に行きようがない。キリス

トの他に行きようがない。キリストの他に行きようがなければ、これは「遺れる者」です。

「さあ、遺るだろうか？」

なんて、冗談じゃない。「だろうか？」なんていう世界ではない。イザヤ書11章11節に、

「その日主はまたふたたび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアッシリ

ヤ、エジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海の

しまじまより贖いたもうべし。」(イザヤ11・11)

「パテロス」とはエジプトの北の方です。「シナル」はバビロンのこと、「ハマテ」はアッシ

リヤのこと。みな贖って連れてくる。イザヤ書12章2節に、

「視よ神はわが救なり。われ依頼しておおるるところなし。主エホバはわが力

わが歌なり。エホバは亦わが救となりたまえりと。」(イザヤ12・2)

「わが力わが歌なり」とは「わが讚美歌なり」ということです。

●隠れています神

イザヤ書にはある大事な言葉、神さまのことを言っている言葉がある。イザヤ書45章15節、

「救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」

(イザヤ45・15)

これは非常に含みのある言葉ですね。多分、キリストの祈りはここから来たでしょうね。

「隠れています神に祈れ」

とキリストは言われたでしょ。「隠れています神」とは別な言葉でいえば「神秘の神」です。

ミステリアスな神。新約の中ではこの「神秘」という言葉をよく「奥義」と訳している。

この奥義という字は「ミステリオン」という字です。言葉では説明のできない世界、魂で

心でパツと受けとる世界です。これが隠れたる世界です。宗教の本当の現実はそうですよ。



「神がもし説明されるならば、それは神ではない」

とエックハルトが言っている。その通りです。これは各人が体験するよりか仕方がない。だから、キリストはあまり説明なさらない。断言的にものを言つてらっしやる。

「聞く耳あるものは聞くべし」

と言う。「隠れています神」という、このイザヤ書45章15節は大事なところですよ。この言葉はルターが好きだった。それならば、我々は何かというのと、我々は

「隠れたる民」

です。遺れる者は隠れたる民。どれが本ものだかわからない。「麦と毒麦」の話があるでしょ。

「放っておけ。収穫の時に、毒麦か本当の麦かわかるから、今は区別は要らな

いよ」

と。そういうことを正岡子規が歌った和歌がある。

「庭もせの草刈りかねつ撫子の花やまじると思つばかりに」

庭も狭いほどに草が茂っているが、撫子はどれだかわからないから放っておこう。はびこっている草をそのままにしておく。今に花が咲いたらわかるだろうと。

我々はどう誤解されようが、どう思われようが、本ものでさえあればいいわけです。品定めは神さまがなさる。「隠れています神」の本当の民は「隠れたる民」で、これが「遺れる者」です。まだ誰も「隠れたる民」ということを言わないらしいけれども、私はそう思う。

鼻先にキリスト教がぶら下がっているようなクリスチャンは僕は嫌いだよ、すぐ二言目には聖書のことを言いだすようなのは。それよりも、誠意の人と語る方がよっぽど楽しい。我々は底光の人にならなければ。外側はちよつとも光つてない。けれども、底には光がある。私は皆さんのことを「遺れる民」と思っているから、今日は、イザヤ書のこのところを言いたくてしよがなかつた。イザヤ書46章3～4節には、

「³ヤコブの家よイスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。⁴なんじらの年老るまで我はかわららず白髪となるまで我なんじらを負ん。我つくりたれば^{もた}抬ぐべし。我また負いかつ救わん。」(イザヤ46・3～4)

懇ろにキリストは私たちをそのように守り、また支えている。

●終末の神の国

イザヤ書の終りの方に凄いことが書いてある。私は文字通りには解釈しようとは思わなけれども。イザヤ書65章17～25節に、

「¹⁷視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す

黙示録です、これは。

人さきものを記念することなく、之をその心におもい出ることなし。¹⁸然



どなんじらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ。視よ、われはエルサレムを造りてよろこびとしその民を快樂とす。

「大いに樂しめ、樂しめ」と書いてある。神さまを樂しむんですよ。

19 われエルサレムを喜び、わが民をたのしまん。而して泣声とさげぶ声とはふたたびその中にきこえざるべし。20 日数わずかにして死ぬる嬰兒といのちの目をみたまざる老人とはその中にまたあることなかるべし。百歳にて死ぬるものも尚わかしとせられ、百歳にして死ぬるものを誣れたる罪人とすべし。

大変だ。面白いことが書いてある。これは終末的な表現ですから。

24 かれらが呼ばざるさきにわれこたえ、彼らが語りおえざるに我きかん。25 豺狼とこひつじと食物をともし、獅は牛のごとく藁をくらい、蛇はちりを糧とすべし。斯てわが聖山のいずこにても害うことなく傷ることなからん。これエホバの聖言なり。」(イザヤ65・17～25)

これは終末の神の国の象徴的な書き方です。黙示録に相通ずるところです。イザヤ書65章の17節から25節がそういうところで、もう一つ、イザヤ書は凄いところがある。

イザヤ書61章の1節から3節まで、

「主エホバの靈われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、¹ 囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、² エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、³ 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえ歡喜のあぶらを予え、うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。」(イザヤ61・1～3)

「キリストの栄光を現わすものと称えられん」

ということ。とにかく、このイザヤ書というのはそういう素晴らしい文字で満ちている。大変なもんだね。イザヤ書60章19～20節、

「¹⁹ 昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠に²⁰ なんじの光となり、なんじの神はなんじの榮となり給わん。

これは黙示録と同じだ。

「日月の照らすを要せず。神と羔羊がその光である」

と黙示録にも書いてある。これはイザヤ書から来ている。だから、これはみなキリストがご自分で受けとつてしまった。こういう預言も全部、キリストで成就しているわけです。大変な人です。

20 なんじの日はふたたび落す、なんじの月はかくることなかるべし。そはエ



ホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日^{おわ}畢るべければなり。」(イザヤ 60・19～20)

とにかく、旧約では何と言つてもイザヤ書です。イザヤ書が中心です。全聖書の縮図みたいなものです。よく読んでごらん下さい。「遺れる者」の参照聖句は他に、10章20、21節、46章3節がある。

「新天地」の所はもう一つイザヤ書27章にある。2節、

「²その日^{かく}如此うたわん。うるわしき葡萄園あり之^{これ}をうたえよ。」(イザヤ27・2)

キリストの民を葡萄園に例える。新約でいうと、

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

というのは、キリストがやはりこういうところから自然に想い浮かべられるのでしようね。

「¹²その日なんじらイスラエルの子輩よ、エホバは打落したる果^みをあつむるご

とく、大河の流よりエジプトの川にいたるまでなんじらを一つ一つにあつめ
たもうべし。」

「大河」というのはアッシリヤ・バビロニアのチグリス・ユーフラテス河のことです。「エジプトの川」とはナイル川です。

¹³その日大なるラツパ鳴りひびき、アッシリヤの地にさすらいたる者、エジプトの地においやられたる者きたりてエルサレムの聖山にてエホバを拜むべし。」(イザヤ27・12～13)

もつと凄いことが書いてあるところがある。アッシリヤもエジプトもみな一緒になつて一つになつてしまふ、という。イザヤ書19章24～25節に、

「²⁴その日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし三つあいならび地のうえにて福祉^{さいわい}をうくる者となるべし。²⁵万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工^{わざ}なるアッシリヤわが産業なるイスラエルは福^{さいわい}いなるかな。」(イザヤ19・24～25)

普段、喧嘩してしようがないようなこの三つの国が一つになるぞ、という。イザヤの終末的な預言というのは本当に凄い。

「どこがいい悪いではない。全部一つになつて幸いを受けるぞ。やれ中国だ、やれロシアだ、何だかんだと、そんなことではない」

と。各国の政治家はイザヤ書を読むといい。日本の政治家なんておよそ聖書を聞いたことがないのだろうな。まったく情けない、神の世界を知らないとは。一番大事なのは政治家と教育者なんです。それがダメだからしょうがない。

● 神の望み

望みなきところになお望みをつなぐためには、我々自身が望みの実体にならなければ



メです。望みとは神さまから来るもので、こちら側から希望する望みではない。神の望みたもうところのもの、その実体はこの遺れる民であります。皆さんは、そういう意味で烈々たる魂です。召団というのはキリストに召されたる団体です。キリストに召されたる団体は本当のエクレシアだから。

京都は福音のために遺されたる都だ、歴史的に言っても、そうならざるを得ない。仏道の本願の先を行くもの、継ぐもの、これが福音の世界です。私はうれしくてしようがない。パウロはキリストに本当に救われたけれども、

「なお追求して止まず」

という。これが本当なんです。救われたから、いよいよ追求する。

「まだ救われないから追求する」

のではない。恵みの力が土台になる。そして、我々は追求してやまない。

「これでいい」

なんていうところはありはしない。

ルカ伝1章の「マリアの讃歌」は、マリアが本当にこれだけのことを言ったとは思いませんけれども、マリアの気持を表わしたのでしょう。46節、

「46 マリヤ言う『わが心、主を崇め、47 わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。

48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。』

「幸福」は「恵福」です。

49 全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖なり。50 その憐憫は代々、畏み恐るる者に臨むなり。

「畏み恐るる者」とは、平伏す者です。

51 神は御腕にて、権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散らし、52 権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うし、53 飢えたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。

これが福音だ、と。

54 また我らの先祖に告げ給いし如く、55 アブラハムと、その裔とに対する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』(ルカ1・46～55)

けれども、「アブラハムとその裔」は本当の意味ではキリスト者です。これが「マリアの讃歌」です。まさに福音的な音信です。

●ペンテコステの預言

ヨエル書の中にちよつと面白い言葉がある。ヨエル書1章5節、

「5 酔る者よ汝ら目を醒して泣け、すべて酒をのむ者よ哭きさげべ、あたらし



き酒なんじらの口に絶えたればなり。6それはことなる民わが国に攻よすればなり……」(ヨエル1・5～6)

と、面白いことが書いてある。それから、

「15ああその日は禍わざわいなるかなエホバの日近く暴風はやちのごとくに全能者より来らん。」(ヨエル1・15)

審判のことが15節に書いてある。ヨエル書2章12節には、

「12然れどエホバ言いたもう、今にても汝ら断食と哭泣なげきと悲哀かなしみとをなし心をつくして我に帰れ。」

「立ち帰れ」という。

13汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。彼は恩恵めぐみあり憐憫あわれみありかつ怒ることゆるく愛憐いつくしみおおい大にして災害わざわいをなすを悔いたもうなり。14誰か彼のあるいは立ち帰り悔いて祝福めぐみをその後にとめのこし汝らをして素祭そさいと灌祭かんさいとをなんじらの神エホバにささげしめたまわじと知らんや。」(ヨエル2・12～14)

「彼」とは神さまのこと。「神さまが悔いる」というような言葉の使い方をしている。それから、2章28節、これは原文でいうと3章1節ですけれども。

「28その後われわが霊を一切の人に注がん。汝らの男子むすこ女子むすめは預言せん。汝らの老いたる人は夢を見、汝らの少わかき人は異象まぼろしを見ん。29その日我またわが霊を僕婢に注がん。30また天と地に徴証しるしを顕さん、即ち血あり火あり煙の柱あるべし。31エホバの大なる畏るべき日の来らん前に日は暗く月は血に変らん。32凡てエホバの名を呼ぶ者は救わるべし。そはエホバの宣のたまいし如くシオンの山とエルサレムとに救われし者あるべければなり。其の遺れる者の中にエホバの召し給えるものあらん。」(ヨエル2・28～32)

ここに「遺れる者」という言葉がある。これがペンテコステの預言です。

「み霊が皆に注がれる時が来る」

という。

私たちは「召団」と言っているけれども、ひとつも垣根を作っているわけではない。垣根なき召団です。組織ではない。組織というのは機械的なもの。これは有機体です。生命的なものは有機体という。キリストが私たちにくださった、今日の御言は「遺れる民」です。あなた方を通して遺れる民が自在に展開していく。

ある枠を作ってはダメです。コップの中の水はこうやって限定されているけれども、こぼれば、水は限定された所から自由に外に出ていく。限定されながら無限な形を持っている形なきもの、そういうのが我々の在り方です。

「小池はどんなやつだ」



と、いくら説明したって、説明にならない。無限定な存在だから。

「へえ、それが福音ですか」

なんて。福音だよ。神社の前に行けば、私はちゃんと敬意を表するからね。そうすると、

「あなたはこれを信じているんですか」

なんて、すぐ、普通のクリスチャンは問題にする。いいではないか、敬意を表わして何が悪い。私は浅草へ行つたつて、お賽銭は投げないけれども、敬意を表する。

東西南北無し、という。無の世界は無限定の世界なり。無限に展開する。そういうのが、無者キリストでありたもう。

●キリストのみ腕を枕に

讚美歌を一つ歌わせてもらいます。

讚美歌404番「山路こえて」

- 1 山路こえて ひとりゆけど、
主の手にすがれる 身はやすけし。
- 2 松のあらし、 谷のながれ、
みつかいの歌も かくやありなん。
- 3 峯の雪と ころきよく、
雲なきみ空と むねは澄みぬ。
- 4 みちけわしく ゆくてとおし、
こころざすかたに いつか着くらん。
- 5 されども主よ、 われいのらじ、
旅路のおわりの ちかかれとは。
- 6 日もくれなば 石のまくら
かりねの夢にも み国しのぼん。

キリストはそのようにして、石を枕にお休みになった。とにかく、

「人の子は枕するところなし」

という。そして、至る所を枕にされた。嵐のガリラヤ湖の舟の中で、転覆しそうになるかと思う時に、キリストは寝ている。弟子どもは、

「主よ、危ない、ひっくり返るかもしれない」

と。すると、キリストは目を醒まして、

「信仰薄きものよ、何ぞ恐れるか」

と言った。キリストにとつては舟板は神の腕なんだ。父の腕に枕してキリストは寝ていらつしやる。そういうのがキリストの現実です。私たちはキリストのみ腕を枕にして寝かしていた。何が起きてても、夜寝るときには、



「主さま！ お休みなさい。お願いいたします」
と祈ってキリストの懐の中に入ってしまう。「眠れない」なんてことはない。あの大政治家グラッドストーンがどんなことがあっても必ず眠れたという。やはりそういう境地です。

19世紀の偉大な政治家は、グラッドストーンとリンカーンとビスマルクです。この三人はみな聖書を本当に身読した人たちです。向こうの偉大な政治家というのはそういうものだ。日本にそういう政治家がいるかというんだ。情けないね、本当に。

私たちは使徒であると同時に預言者なんです。キリストの名のためには、人に棄てられようが、恥をかこうが一向差し支えない。大いにやっつけていきましょう。

「我が名を否む者は、我れ知らず」
とキリストに言われる。

今日は、遣れる民なるあなた方とともに集会ができて大変楽しかった。ただ感謝のみです。

● 祈り

祈ります。主さま。あなたに在って敬愛するところの兄弟姉妹たちと一緒に一昨日からこのようにして、あなたの聖言聖霊みことばみたまの中に入れて、まことにありがとうございます。私たちはあなたの聖霊聖言に在って一つです。そして、一人ひとりには本当に、「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」と、そのようにして、あなたの生命の水を注がれて、一人ひとりが天的な生命でいよいよ進んでまいります。この喜び、この生命を人に分かちて参りたく存じております。必ずそのことができることを信じて、聖名を讃え奉ります。どうぞ、一人ひとりをその人らしく十全にお使いくださらんことを願ひ奉ります。

○兄弟をはじめ、京都の兄弟姉妹たちの主に在るところのいろいろなお世話にあずかりまして、ありがとうございます。どうぞ、この大事な京都召団をいよいよ、あなたがこれを慈しみ、支え、それぞれの個々の問題をあなたの驚くべき聖力みちからにより、御憐れみによって、それにうち勝っていくことができることを信じて、聖名を讃え奉ります。一切において、あなたの聖名を讃美してまいります。

ここに集まってきた兄弟姉妹たちはどこから来ておりましたとも、この兄弟姉妹たちと我々の交わりは、何ものをもってもこれを引き裂くことができません。主に在るところの、この見えざるところの交わりをいよいよ、あなたの聖名の故にこれを力強く進ましめたまわんことを切に願ひ奉ります。

たくさん祈りたきことがあります。兄弟姉妹たちの全身にあふれる感謝と祈りと讃美とともに、主イエス・キリストの聖名に在って捧げ奉る。アーメン！

